



# 君津商工会議所 FAX通信

会員の皆様へ…会頭からのメッセージ  
平成28年7月14日(木)

Vol. 3 3 1

## 全国商工会議所 観光振興大会京都参加報告

### 秋元 秀夫

7月11日から13日まで京都で開催された大会に参加して参りました。秋の京都は何度も訪れたことはありますが、夏は初めてでありました。会場は平安神宮に隣接したロームシアター京都で行われましたが、会場を囲む街路樹はもう蝉の声でいっぱいでした。盆地京都はむし暑いという第一印象でありました。

今回は6月7月の総会月で忙殺されておりましたが、分科会「伝統と革新を重ね合わせて～おもてなしの文化を育む～」とエクスカーション「小学校跡地活用ツアー」に是非参加し、時間がとれたらば先日テレビの長時間番組で見た「鴨川を人々が渡る飛び石、夕暮れ若者たちが憩う大きな置石のある風景」を直接見て小糸川、小櫃川へと提案してみたかったからです。大会はまず清水寺森貫主によって「創」が揮毫され、三村会頭からは「この大会は2020年オリンピック、パラリンピック「交流文化 観光の創造～全国からの智慧を活かした地方創生の取り組みを！」をテーマとして昨年外国人観光客は年度ベースでは2000万人とわずか3年間で倍増し、2020年には4000万人と言う意欲的なビジョンがあげられております。観光が極めて大きな役割を果たす時代であります。その推進力となるのは「連携」であります。各地の商工会議所が地域をリードして「住んで良し、訪れて良し」の観光

立国によって各種産業、交流人口、雇用拡大の実現に寄与して頂きたいと挨拶されました。私が選んだ第5分科会「伝統と革新を重ねておもてなしの知恵と文化を育む」でありました。要約しますと京都女子大学西尾久美子教授の基調講演、司会によって京都の老舗の西陣織、料亭、和菓子の若い3人の後継者たちをパネリストとした分科会でありました。私の聞いた結論を申し上げますと京のお茶屋、置屋、舞妓、舞子を始めたとしての京都の伝統文化が何千年来続いてこられたのは①伝統文化の原点を探求し、理解して老舗を守り継続して行く知恵を育てながら時代のニーズには不易流行を基としておもてなしの心を大切に守り育てて来た。こうした歴史を貫いて居るものは目先の金銭にではなく、常に仲間達を大切に、地域社会と共に生きることが基本でありました。分かりやすく言えば置屋、和菓子、織物、料亭の仕組みは置屋で例えるならば師匠、結髪師、化粧師、小間物屋、呉服屋、男衆、御茶屋への出入り組織は変わることなく、また一時的な売上拡大を求めることなく、長期に取引を続けることによって地元へ還元させ、共に百年続く商いを求めてきた。これが京都を支えている哲学だと私は思いました。学校跡地の利用、私の想像した形とは異なりましたが、君津市は学校統廃合、給食センター、偕楽園、観光センター、老人、幼児の施設問題をバラバラに考えるのではなく、それぞれ集合共存活用を考えるべきと思っております。川を「飛び石」で遊び、わたって隣の町内や村へ行く朝夕、川に人が集まる親水感性も必要と考えらからです。

富津市長選に「富津空港」再燃？かも…  
夏は朝型観光、夜景観光が良いかもと京都で思いました。良い夏をお過ごし下さい。

追伸：送信が遅くなり申し訳ございませんでした。